

## 資料

# オーラルヒストリーと張学良研究<sup>1</sup>

華 立

—

2001年10月14日、数奇な人生を歩み、「中国近現代史最後の生き証人」とも呼ばれた張学良が、アメリカ・ハワイの住所で死去した。101歳の高齢であった。

張学良は、奉天軍閥張作霖の長男として生まれ、1928年、日本関東軍に爆殺された父親の後を継いで28歳で中国東北地方の最高権力者となった。以降、東北易職、中東鉄道事件、9・18事件（満洲事変）、西安事変など、中国ひいては東アジア近現代史の転換点となったいくつもの重大な出来事を中心に立っていた。しかし、1936年の西安事変後、蒋介石に身柄を拘束され、半世紀以上にわたり軟禁生活を余儀なくされたため、歴史の表舞台から姿を消すこととなった。このような張学良に対して、彼の最晩年にあたる1990年代前半から、中国と海外の歴史研究者がふたたび熱い視線を注ぐようになった。人物の生涯に重点をおく「張学良研究」は、彼が世を去って十数年後のいまもさかんであり、多くの成果を見せている。

この「張学良研究」ブームともいえる研究動向を作り出したきっかけは、いうまでもなく、1990年以来張学良本人が幽閉状態から徐々に解

放され、社会との接触が可能になったことにある。そして50年以上も口を固く閉ざしてきた「生き証人」である張学良がようやく重い口を開こうとする際に、この人物の特殊な経歴から、取材希望が殺到した。これを背景に、この間の「張学良研究」では、近來脚光を浴びている「オーラルヒストリー」(oral history)の手法が大いに活用され、またその点で特徴づけられている。

周知のごとく、張学良は1936年の西安事変で蒋介石を監禁し、内戦停止、共産党との共同抗日戦線の結成を蒋介石に迫った。事件後、彼は蒋介石を南京まで同行したが、そのまま逮捕され、死刑は免れたものの、監禁されながら大陸の各地を転々とさせられた。1946年、国共内戦の開始にともない、身柄はさらに台湾へ移送され、以後、島内において厳重監視の下住所を変えながら幽閉生活を続けた。

転機がやってきたのは1980年代終わりの頃である。1975年に蒋介石、1988年には息子の蒋経国が死去したことにより、張学良の境遇は改善され、外出の自由が増えた。1990年5月、張群をはじめ多くの国民党長老が催した張学良90歳の誕生日の祝宴に、彼は54年ぶりに公の場に姿を現した。この出来事は大きな意味を有した。

<sup>1</sup> 本稿はJ S P S 科研費(26390882)『1929年の中東鉄道紛争と日ソ関係の転換』(代表者：藤本和貴夫)の

成果の一部である。

国民党側による張学良に対する事実上の名誉回復として捉えることもできるからである。

政治環境が緩和される中、張学良は1990年に一部の取材要請に応じた。翌年には海外への渡航も許可された。張学良夫妻は子女が在住するアメリカを頻繁に往来し、1994年からハワイに長期滞在することになったため、外部との接触や取材の門戸はさらに広がった。かつての風雲児、しかし長年の幽閉によりその存在すら世間に忘れられてしまった張学良が、激動する1920～30年代の中国について何を語るのか、多くの謎に包まれているその時代の真実にどこまで近づくことが可能になるのであろうか、取材者たちの共通した関心であった。

## 二

1990年から張学良が死去する2001年までの十余年のあいだの取材活動を行い、のちにインタビューの内容を整理・出版したものを、中国語では「張学良口述歴史」と称している。新聞やジャーナルの単発的取材報道を除いて、主なアプローチと成果は以下の数種に代表される。ここでは各々の取材経緯および当該「口述歴史」の内容構成上の特徴について、簡単に紹介したい。

1. 張学良口述・唐徳剛撰写『張学良口述歴史』(2007年中国档案出版社初版、2009年遠流出版事業股份有限公司、2013年山西出版傳媒集團・山西人民出版社などよりも出版)



唐徳剛 (Te-Kong Tong 1920～2009) はアメリカ華人学者・歴史家。1959年にコロンビア大学で歴史学博士号を取得後、同大学で教鞭をとり、同大学のオーラルヒストリー・中国プロジェクトの運営にも尽力した。1972年よりニューヨーク市立大学教授、専門は哲学・歴史。

張学良に対するインタビューは1990年1月に始まって、同年5月まで続いた。対談は台北市北投区の張学良宅及びホテルで計5回行われ、それを11のカセットテープに収録した。唐徳剛によれば、張学良は当時自分自身の伝記を作ろうと考え、その執筆も唐氏に託そうとしていたが、完成には至らなかった。本来この5回にわたるインタビューは唐氏の張学良取材計画の第一弾であり、継続的に行う予定であったが、途中から張学良側の事情により中止するという結果となった。また唐徳剛編集の張学良口述歴史の公式出版にも紆余曲折があった。2002年に中国の出版社から出版企画についての打診があり唐氏もこれを承諾したが、諸般の事情で実際に刊行されたのは2007年7月、当初の合意から5年もの時間が要された。2年の後、唐徳剛は89歳で他界した。

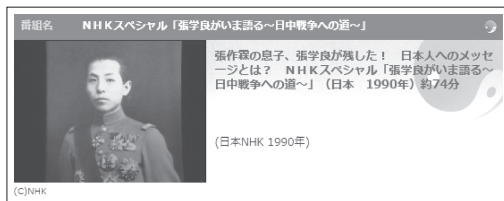
当書の構成について、メインの口述部分は七章からなり、張学良の第一人称で綴った文面である。目次は：第1章 身世(身の上)、第2章 年少時(幼少時代)、第3章 女人們(女性たち) 第4章 内戦和将領們(内戦と将校たち)、第5章 不做東北皇帝(東北の皇帝になろうとしない)、第6章 九・一八与西安事变(九一八事变と西安事变)、第7章 余生(人生の後半)

口述部分のほか、①唐徳剛の「代序」(序文にかえて)、②「外編・唐徳剛論張学良」(唐徳剛、張学良を論ずる)に唐氏の張学良研究論文4篇を収録、③付録一には「先大元帥的早年生活和事功」は唐徳剛が筆録、張学良が父親の張作霖の生涯について語ったもの(未定稿)、付

録二には年表（1901～2001）などが含まれている<sup>2</sup>。

ほかに本書について特筆に値するのは、対談時の張学良の肉声を収録したCD（およそ1時間）が付されていることである。多少の雑音はあるものの、張学良の力強い東北弁の声がよく聞き取れる。歴史の有名人であるこの主人公との距離が一気に近くなったというのが、これを聞いた筆者の感想である。

2. 日本NHK取材班：NHKスペシャル「張学良がいま語る 日中戦争への道」（1990年12月初放送）、著書『張学良の昭和史最後の証言』（NHK取材班・臼井勝美、角川書店、1991年）



唐徳剛の取材とはほぼ同じ時期に、日本NHK取材班も張学良とのコンタクトを試みていた。1990年6月17日にはようやく初会合が実現し、8月3日からNHK特別主幹の磯村尚徳氏と桜美林大学臼井勝美教授が聞き手を務め、張学良への本格的インタビューが始まった。取材は8

月5日まで三日間連続で行われ、ホテルで食事を共にしながら、一日数時間にわたり対談したという。話題は広範囲に及んだりするが、焦点は、放送番組のタイトルにもあらわれているように、日中関係、ことに日中戦争に関するものである。また対談の中で張学良は、「私は21世紀を生きる日本の若者に話がしたくて（取材を引き受けた）」、「私は日本の若者にぜひとも言いたいことがあります。日本の過去の過ちをまず良く知ってください。そして過去のように武力に訴えることを考えてはいけません」と、NHKの取材に応じた理由を繰り返し強調していた。

上記NHKスペシャルとともに刊行された著書『張学良の昭和史最後の証言』は、第1章 張学良の登場、第2章 若きリーダー、第3章

満州事変と満州国建国、第4章 運命の西安事件、第5章 半世紀にわたる監禁生活で構成され、対談録の体裁ではなく、歴史家の視点による時代背景の説明を入れつつ、テーマごとに張学良本人の談話内容を織り込んでいる。付録に「解説」として臼井勝美「張学良について」、松崎昭一「日本の大陸政策」の二篇と、関連年表、参考文献などがある。また臼井勝美は文中において、「インタビューのなかで放映ではカットされた」張学良の重要な談話についても言及している。その一つが「張学良が日本ははっきりと中国に謝罪すべきだ（中国應該对中国賠罪）」という趣旨の、かなり厳しい回答が返ってきたこと、もう一つは張学良が逆にNHK取材班に質問を行い、「日本は何故東条（英機）のような戦犯を靖国神社に祭っているのか。靖国神社に祭られる人は英雄である。戦犯は日本国家の罪人ではないのか。彼らを祭っているのは、彼らを英雄と認めたからなのか」

<sup>2</sup> ここでは初版の目次にもとづいている。2009年の遠流出版事業股份有限公司版では郭冠英の序「笑語燈前老

少儒——追著張學良的歷史奧運（他序）」が追加されている。

と、問い詰めたことである<sup>3</sup>。

1992年、『緘黙50余年張学良開く口説話——日本NHK記者專訪録』と題した、上記著書の中国語版（管寧・張友坤訳）が遼寧人民出版社より刊行された。

3. 郭冠英：ドキュメンタリー『世紀行過—張学良口述史特輯』（台湾TVBS、2000年6月放送、香港鳳凰衛視（フェニックステレビ）、同年7月初放送、2016年9月再放送）



郭冠英（Guo Guan Ying）、本籍貴州省、台湾新竹市生まれ、台湾『聯合報』ベテラン記者、台湾行政院新聞局幹部職員、駐トロント台北經濟文化代表処新聞組長、『中国時報』顧問などを歴任している。

郭冠英は大学時代の親友王一方（国民党高官王新衡の息子）のパイプで、青年時代（1970年代）から張学良と面識があり、幽閉時代の張氏の邸宅を出入りすることもあった。このような特別な人脈により、上述の唐徳剛氏や日本

NHKの張学良取材も、彼の力添えによるところが多かったといわれる。

郭冠英自身が張学良のテレビ取材に踏み切ったのは1993年である。これに先立ち彼の『張学良側寫』がすでに台湾で出版されている。自らが架け橋を務めたNHK取材班の番組『張学良がいま語る』が日本で放映後、日本のみならず、中国大陸・台湾でも大きな反響が起き、のち中国語版が台湾で放送されたことに刺激されたことも、この企画を決意した一因であったという。前期準備を整え、同年2月より約3ヶ月間張学良へのインタビューを行い、終了後、撮影チームはさらに大陸へ渡り、かつて張学良の足跡が及んだ各地で四十日間ロケをした。一年余りの時間をかけて仕上げたこのドキュメンタリーは、張学良の400分超える口述映像を丹念に編集し、4回シリーズの形で完成された。しかしプロデューサ兼集資者のパートナーから、上映は「なお時期尚早」との意見が出たため、しばらく封印せざるを得なかった。郭冠英はドキュメンタリーから手を引き、アメリカに渡った。ようやく七年後の2000年6月、張学良の百歳生誕を祝う形で台湾のTVBS（Television Broadcasts Satellite）チャンネルで放送された。

4回シリーズ（4×53分）の『世紀行過—張学良口述史特輯』は次の構成となる。カッコウの中は各集内容のキーワードである。

第一集：白山黒水（少帥憶兒時東北、從馬賊到奉天王的張作霖、與孫中山、師友郭松齡）

第二集：国难家仇（愛國狂、我是中國人、父親之死、東北易幟、918的不抵抗、上海戒毒）

第三集：西安事变（反對内戦、安内攘外之爭、密會周恩來、華清池兵諫、感召金石、負荆請罪、山居生涯、東北骨牌）

第四集：真自由（移送台灣、228事件、與蔣

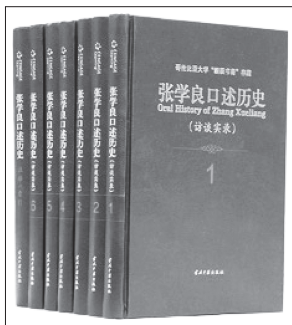
<sup>3</sup> NHK取材班、臼井勝美『張学良の昭和史の最後の証

言』、259-260ページ。

介石の骨肉仇讎、信基督－真自由、四弟學思橫眉眾指、燕雀鴻鵠)

台湾で上映されてまもなく、これを知った香港鳳凰衛視株式会社が同ドキュメンタリーの、香港と周辺地域における放送権を購入した。既存の四集には一切修正を加えなかったが、鳳凰衛星テレビの司会者と郭冠英・張學良の親族・研究者らとの対談を番外編として追加して7月にも放送し、香港をはじめ中国大陆まで広く視聴された。

4. コロンビア大学『張學良口述歴史(訪談実録)』(張學良口述、張之丙・張之宇訪談、『張學良口述歴史』編集委員会整理、当代中国出版社2014年刊行、全7巻、以下『訪談実録』と略称する)



アメリカ・コロンビア大学は世界における「オーラルヒストリー」のパイオニア的存在である。同校のオーラルヒストリー調査室(Columbia University Oral History Research Office)は1948年に設立され、世界で最初に作られたオーラルヒストリーの組織的プログラムで、膨大なオーラルヒストリーのデータを保有

していた<sup>4</sup>。現在ではオーラルヒストリー・センター(Columbia Center of Oral History、略称C C O H)を中心に調査と研究の活動を展開している。

同センターは張學良の承諾を得て、1991年12月から1993年8月にかけて、同大学の張之丙教授と張之宇女史(張之丙の姉)の二人を主要な聞き手として、張學良に60回に及ぶインタビューを行った。録音時間は延べ7000分に及んでいる。すでに多くの関係者が指摘しているように、これが1990年代以来の「張學良口述歴史」のなかで、談話時間がかつても長く、内容が最も豊富なものに数えられる。インタビューで得た資料は、張學良生前の願望により、すべてコロンビア大学に寄贈され、張學良夫人趙一荻女史が創立した閲覧室「毅荻書齋」の所蔵となっている<sup>5</sup>。ただし張學良の存命中には公表しないことを前提としていた。

『訪談実録』の「出版説明」によれば、2009年、コロンビア大学、日本・雄松堂、北京・当代中国出版社などの合意のもと、「毅荻書齋」所蔵張學良口述資料の整理と編集が着手された。それまでにコロンビア大学がすでに人手を投入してすべての録音を文字に書き起こしているが、ミスが甚だ多く、利用できるレベルではなかった。という現状を鑑みて、口述記録の整理の責任を負った当代中国出版社は、中国社会科学院近代史研究所・遼寧大学・瀋陽張氏帥府博物館などから専門家十数名を招いて「整理・編集委員会」を組織して、総主編には民国史専門家、蒋介石研究の第一人者楊天石、主編には張學良研究の専門家張友坤を任じた。それから

<sup>4</sup> 国立国会図書館リサーチ・ナビ掲載コロンビア大学オーラルヒストリー調査室の紹介による。出典：<https://navi.ndl.go.jp/kensei/entry/ORL-1.php> (参照日時：2017年3月15日)

<sup>5</sup> 「毅荻書齋」は張學良夫人趙一荻女史がコロンビア大学図書館の中に創立した閲覧室の名称である。「毅」は

張學良の号「毅庵」から、「荻」は夫人趙一荻の名前からとったものである。同閲覧室には張學良口述記録のほか、蒋介石・宋美齡などの要人との往復書簡、手記、日記なども所蔵されている。なお、この情報ははじめ、本稿を執筆にあたって、中国社会科学院張友坤教授から多くの教示を賜った。ここに謝意を表します。

5年余り、7巻の『訪談実録』が仕上げられた。

『訪談実録』の体裁（構成の原則）は次の通りである。

（1）訪談時の様子を尊重する。聞き手と張学良の会話をそのまま記録する。すなわち問答式である。

（2）テーマ別で編集するのではなく、訪談時間の順に従って内容を配列する。一回の訪談を一ユニットとし、計60のユニットとなる。

（3）各ユニットのなかで談話内容を提示する見出し（キーワード）を適宜つける。

（4）全書の注釈と索引を作成して、第7巻とする。

主編を務めた張友坤は、『訪談実録』の特色を張学良の「もっとも大胆な口述歴史である」と表現している。理由は、張学良は1990年台湾で表向きに行動の自由を得たが、周囲に依然監視網が張られており、当然のことで対談にも多くの禁忌があった。『訪談実録』の取材地が台湾からアメリカに移り、安堵感が増し、より率直な談話が可能になった<sup>6</sup>。一方、「導言」（序言）の執筆者王海晨は、録音資料を編集する際の苦労を明かしている。とくに問題となるのは対談内容の重複と要点の分散、及び語りが断片的になっている箇所が多かったことである。そのため、5年余りに及ぶ編集作業が、「口述史料」段階の録音資料を、さらに「口述歴史」としての『訪談実録』に飛躍させるのに不可欠であった<sup>7</sup>。

### 三

オーラルヒストリーとは何か、この分野の第

一人者、エセックス大学のポール・トンプソン氏はそれを、「記憶を歴史にする」ことであると定義している<sup>8</sup>。また、これまでの研究者の指摘にあるように、オーラルヒストリーが研究手法として発展する経緯をみると、それを目的、研究対象によって二系統に大別することができる。すなわち、「政治家、官僚など公的地位にあったものの記憶を国家財産として残す作業」と、「歴史として残りにくいマイノリティ、技術者、女性などを対象としたオーラルヒストリー」の二系統である。「張学良口述歴史」の場合、語り手の経歴、当該人物の歴史的位置付けなどから、前者に属することは明らかであろう。

近年、「張学良口述歴史」の多数刊行・公開により、こうして得られた張学良晩年の証言を新しい史料として、中国近現代史とくに1920～30年代に起きた複数の重大事件を再検討する動きが顕著になっている。とりわけ研究者の関心が次のいくつかの問題に集中しているように思われる。

1. 東北易幟における張学良の動機
2. 中東鉄道紛争における張学良の思惑、蒋介石国民政府との関係
3. 九一八事変すなわち満州事変への張学良の対応、なぜ東北軍に「不抵抗」を命じた
4. 張学良と日本との関係（張作霖時代から満洲事変まで）
5. 西安事変における張学良の動機、役割、張学良個人の生涯の転換点でもあった西安事変に対する評価
6. 張学良と共産党の関係、共産党員であったと伝えられているが、確かな事実なのか

<sup>6</sup> 張友坤「張学良最“大胆”的口述史」、『環球人物』2014年9月26日。

<sup>7</sup> 王海晨「導言」、『訪談実録』第1巻、7-27ページ。

<sup>8</sup> ポール・トンプソン（酒井順子訳）『記憶から歴史へオーラルヒストリーの世界』、青木書店、2002年。清

水唯一朗「日本におけるオーラルヒストリー—その現状と課題、方法論をめぐって」を参照。出典：<http://web.sfc.keio.ac.jp/~yuichiro/OralHistory2003.pdf>（参照日：2017年2月10日）

## 7. 張学良と蒋介石、そして宋美齡との関係

2010年6月、張学良生誕110周年記念を兼ねて、瀋陽張氏帥府博物館張学良研究中心、遼寧張学良暨東北軍史研究会共同主催の「張学良口述歴史国際学術研討会」が瀋陽で開かれた。同年12月に出版された同研討会の論文集<sup>9</sup>を通じて、現時点で公開された「張学良口述歴史」に対する史料学的研究と、「張学良口述歴史」を活用した歴史研究の新しい動向がみられる。紙幅の制約によりここではその内容から数点にしぼって紹介することにとどめる。

張学良の証言のなかでもっとも衝撃的だったものの一つが満州事変後「不抵抗政策」の責任の所在である。NHK取材班との対談の中で張学良は多少曖昧であったが、蒋介石が直接指示したという通説の否定を示唆している。唐徳剛や郭冠英との対談ではその点をいっそうはっきりと、張学良自身が「不抵抗」の命令を下したという。「不抵抗」とした原因については、「判断錯誤」、すなわちその時点においては日本の侵略の陰謀を十分に見通せず、情勢に対する判断を間違えたからである。それゆえ日本軍に武力拡大の口実を与えないためにもその挑発には乗らないと考え、東北軍を撤退させたのである。この説明はのちの『訪談実録』でも貫いていた。この証言に対して、一部の研究者は当時の情勢に裏付けられているものとみているが、逆にこれは張学良の自己弁護であり、歴史を後から「再創出」したものではないかと疑う見方もある。また、従来は定説であった不抵抗を指示する蒋介石の電報の存在は、張学良の証言により否定される方向になりつつも、満州事変が起きる前から蒋介石がすでに日本に抵抗しないこと（＝「不抵抗主義」）を方針としており、

張学良の不抵抗政策はこれに忠実に従ったものと見るべきであり、不抵抗政策の張本人は蒋介石にはかならないという見解もある。

東北をめぐる国際情勢に大きな影響を与えた1929年の中東鉄道紛争（＝「中東路事件」）についても張学良はたびたび言及した。ソ連側に強硬な姿勢で挑んだ理由について、全国的に利権回収の機運が高まるなか、東北の地位をさらに向上させるのが目的であり、またその決断は東北における日本勢力の膨張を意識したのもでもあった。ソ連から一挙に中東鉄道の管理権を回収できれば、日本に対しても戒めの効果があるだろうと考えたからである。その後武力行使に踏み切ったが、対戦相手（ソ連）の実力を過小評価したため、惨敗の結果となった。振り返ってみればまさしくことわざの如く、「自不量力」（身の程知らず）そのものであったという。中東路事件をめぐる研究で一つの争点になっている蒋介石と南京政府の対応と責任について、張学良の証言は基本的に「張氏主導論」<sup>10</sup>を認めたが、開戦直前の7月7日に北京入りして蒋介石と会談したことや、南京政府が物的支援の約束を食言したことに張学良が落胆していたことなども明らかになった。開戦を強く後押しして、戦場で敗北し成す術をなくした張学良を救おうとしなかった南京政府の責任も含んでいるとみるべきであろう。

西安事変に関する証言も注目の焦点であった。張学良の「口述歴史」を通じて、いくつかの真相が明らかになった。一つは蒋介石監禁の経緯について、あらかじめ周到に練られた計画があったわけではなく、「捕まえてから考える」と漠然と考えていたこと、最初の提案者は西北軍司令官の楊虎城であったが、実行へ移す

<sup>9</sup> 郭俊勝、胡玉海主編『張学良口述歴史研究』（張学良研究中心系列叢書）、遼寧人民出版社、2012年。

<sup>10</sup> 拙稿「中国における中東鉄道研究—近年の研究動向を

中心に」（『東アジア研究』61号、2014年）を参照されたい。

段階から張学良が主導していたことである。もう一つは西安事変を解決する際の協議内容である。蒋介石は西安を脱出後、釈放に前提条件は付されなかったとするが、張学良によれば、蒋介石と周恩来との合意内容は文書ではなく、口頭での了解であった。合意内容を公開して蒋介石の尊厳を傷つけてはならないと判断したからである。また蒋介石と南京へ同行した理由について、「蒋介石の威信を立て直し、その指導のもとで抗日戦争を戦う」と考えたからであるという。また、共産党との関係と、実際に共産党員であったのかについて、張学良は西安事変を「愛国的行動」と繰り返し強調するほか、周恩来を「有能で見識が高く、忠告は的を射ていた」と評価し、共産党は「愛国的で非常に力のある政党」と好意をもっていたことが分かる。1980年代公開されたソ連側の資料などを根拠に、「張学良は共産党に加入していた」と判断する研究者もいるが、本人の証言では「私は共産党を擁護していた」、「私の内心からすれば共産党（員）と言って差し支えない」、という程度の発言に止まっており、謎が完全に解けたわけではない。

「張学良口述歴史」は史実の真相解明に不可欠だけではなく、張学良の人物研究という視点からも貴重である。それは、インタビューを通して話し手の人生、価値観をより体系的に把握することができ、文章化されたものだけでは十分に感じ取れない話し手の思考形態や行動様式を深く認識していくことが可能になるからである。張学良が証言の中で何度も自分は「愛国狂」（強烈な愛国者）、「私は中国の国家統一を切に願う」、日本側の働きかけに対して「私が中国人だ」と言い返してきっぱりはねつけたと語っている。こうした中国の国家統一への強い

熱意が彼の政治生涯を支えた根本であり、張学良という人物とその行動を理解する上で最も重要な手掛かりである。ここでは同論文集の範囲から少し逸脱するが、臼井勝美氏は取材終了後、張学良本人に対して次のような感想を述べた。「連続三日間、毎日数時間にわたった張学良とのインタビューに同席し、夕食も三度ともにしたが、張学良の爽やかな人柄にはすっかり魅了されたといつて過言でない。最初は志操の高い軍人という印象であったが、次第に、あるいは世に「英雄」と称せられる人の一人かもしれないとの思いを深くしたのである<sup>11</sup>。」

最後に、同論文集の「前言」（前書き）<sup>12</sup>の一節を紹介して本稿の結びに代えたい。

「研究を通じて、学者の間では（一定の）認識を共有することができた。張学良口述歴史によって人々がこれまで持っていた張学良像を覆うことはなく、これまで定まっている歴史の基本的見解を覆すようなことも起きていないが、だからと言ってこの口述歴史の歴史学的価値を看過することにはけっしてならない。……張学良口述歴史は張学良を研究するにおいて不可欠な重要史料であり、張学良研究に存在するさまざまな疑問点や難点の解決に手がかりを与えてくれる。また張学良を多様な角度から読み取ることが可能にしたことで、研究の深化を促し、多くの新しい成果をもたらしている。……（口述歴史は）史料として限界があり、話し手の主観性、聞き手の学識、個性、認識の偏向などに左右されることになる。言及された史実を確かめるために、他の資料との相互検証が不可欠となり、そうしてはじめて歴史の真の姿が浮き彫りになるだろう。」

<sup>11</sup> NHK取材班、臼井勝美『張学良の昭和史最後の証言』（角川書店、1991年）、260ページ。

<sup>12</sup> 郭俊勝、胡玉海主編『張学良口述歴史研究』（遼寧人民出版社、2012年）、前言2-3ページ。

## 資料

# 「牛棚」の記憶を残すために —『流水何曾洗是非—北大「牛棚」一角』著者インタビュー—

姜 若 冰

### 一、はじめに

2016年は、中国の文化大革命（正式名称は、「プロレタリア文化大革命」、以下略して「文革」という）の発動から数えて50年となる。

1966年から1976年まで、十年にわたって続いた中国の文革は、「四人組」の逮捕<sup>1</sup>で事実上終結した。1978年12月に「改革開放」政策の実施が決定され、1981年6月の中国共産党第十一期中央委員会第六回全体会議で「建国以来の党の若干の歴史問題に関する決議（いわゆる『歴史決議』）」が採択され、文革は「指導者が誤って発動し、反革命集団に利用され、党、国家や

各族人民に重大な災難をもたらした内乱である」と全面否定された。

「歴史決議」の採択から四十年近く時間が過ぎ、著しい経済成長を遂げてきた現在の中国においては、文革はどのように認識されているか、文革開始50年という節目に当たり、再び考えなければならない課題だと思われる。

ちょうど節目に当たるこの年に、筆者は『流水何曾洗是非—北大「牛棚」一角—』<sup>2</sup>（以下略して「本書」という）の日本語訳作業に参加するチャンスを得た。本書は、北京大学元副学長郝斌教授の文革回想録である。1966年、郝斌教授は北京大学歴史学部の若手教員として文革



北京大学西校門



著者郝斌教授（右）と

<sup>1</sup> 四人組とは、文化大革命を主導した江青（毛沢東夫人）、張春橋、姚文元、王洪文の四名のことを指す。中国では「四人幫」と呼ばれる。1976年10月に逮捕され、1980年最高人民法院特別法廷で有罪判決を受け、収監された。四人とも獄中で余生を送った。

<sup>2</sup> 2014年1月、台湾大塊文化出版によって繁体字版が上梓された。日本語による紹介は筆者の書評『東アジア研究』第65号（大阪経済法科大学アジア研究所、2016年3月）を参照されたい。

に巻き込まれ、当時三十代半ばの彼は、紅衛兵や大勢の民衆の前で批判され、「牛棚」と呼ばれる強制労働収容施設に入れられていた。50年が経とうとしているなか、郝斌教授はどのような心情で当時の記憶を辿り、この回想録を綴ったのか、翻訳作業中で出た幾つかの確認すべき問題を携えて、北京大学に著者を訪ねた。

## 二、著者を訪ねて

北京大学の西校門は、90年前の燕京大学時代に作られた、非常に格調高い建造物である。毛沢東の筆による「北京大学」の額を上方に掲げ、今でも北京大学のシンボルとして、記念撮影をする観光客でにぎわうスポットである。その西校門をくぐってすぐ、目の前に古風の佇まいを見せる「辦公樓<sup>3</sup>」がある。その応接間で、80歳を過ぎた郝斌教授は元気な姿で迎えてくれた。

なぜ、本書の執筆に至ったか、筆者の質問に郝斌教授は穏やかな表情で答えた。「80年代から90年代にかけて、北京大学の文革経験者による文革回想録が幾つか出版された。よく知られるものとして、例えば周一良教授の『畢竟是書生』<sup>4</sup>、季羨林教授の『牛棚雜憶』<sup>5</sup>が挙げられる。しかし今世紀に入ってからは、新たに出版されるものはさほど多くない。文革を全面的に否定した1981年の『歴史決議』は、四十年近い時を経て、取り上げられることも少なくなってきた。文革開始から半世紀が過ぎ去ろうとしている今、過去の教訓がまだ十分に汲み取れていないと思われる。このままにしておけば、文革

経験者は相次いでこの世を去っていくのみである。この現状に、危機感を抱いた。歴史は忘れてはいけないという思いで、本書を執筆した」という。

郝斌教授は1953年北京大學歴史学部に入學してから、今日までの60余年間、北京大學の歴史とともに人生を歩んできた。50年代建国当初の中国社会の雰囲気について、郝斌教授はとても高く評価している。「あの時は、人々は新中国を建設する一心で、隔たりなくお互い協力し合っていた。例えば、私はほかの任務で科目を別の担当教員に引き継いでもらった時、自分が心血を注いで作った講義ノートや資料などを、躊躇せず無償で提供した具合であった。私だけではなく、あの時は誰でもそうしていたのだ」という。海外からも数多くの人材が祖国建設のために帰国し、ましてや外国人まで魅せられて中国に理想を求めて移住する人がたくさんいるほどであった。あの時の民心や社会情勢を維持できればと郝斌教授は残念がっていた。

1950年代の半ば以降、政治運動が相次いでいた。社会の雰囲気が根本から一変したのは60年代後半の文革であった。ここで郝斌教授は本書では触れなかったエピソードを幾つか披露してくれた。

1つは、明清史研究で知られる歴史学部の商鴻達教授<sup>6</sup>のことである。「文革で初めて批判を受ける我われは、屈辱な姿勢を強いられた時、本能的に最初は反抗するのであったが、商先生だけは違って、まったく反抗の意思を見せずに平然とすべてを受け入れていたのである。ずっと不思議に思っていたけれど、のちによく

<sup>3</sup> 北京大学の学長や党総書記の執務室、中心的な行政機関が入っている建物、大学の重要な行事もここで行われることが多い。

<sup>4</sup> 北京十月文芸出版社、1998年。日本語版『つまりは書生—周一良自伝』は1995年東海大学出版会より出版された。

<sup>5</sup> 中共中央党校出版社、1998年。

<sup>6</sup> 商鴻達（1907-1983）、河北省出身。1929年から北京大学で学者、詩人劉半農氏に師事し文学を学んだが、劉氏の病没で専攻方向を転じて明清史専門家孟森氏に史学を学んだ。

考えて分かった、彼は五十年代からすでに『反革命』として批判されていたからであろう」。

「商先生に感動したことはもう一つある。周知のとおり、商先生は民国年間の清史研究大家であった孟森の弟子である。孟森が病気で亡くなってから、商先生は毎月自分の給料からお金を捻出して恩師の残された家族に経済支援をしていた。文革の窮地に陥り、僅かな生活費しか与えられなくなった時でも、彼は絶えることなく支援を続けたのであった」。

商先生は50年代から文革終了まで約25年間、専門分野の科目を教えることが許されなかったが、文革終了後、彼は研究と教学に復帰することができ、晩年に数多くの研究業績を残し、清史研究の若手人材を育てることもできた。いっぽう、文革の嵐に耐え切れず、自ら命を絶った人も多くいた。郝斌教授によれば、多い時は、二か月間に20数人の訃報が耳に届いたという。「臨時収容施設にされた第一体育館で批判対象たちが寝泊りしていたが、朝の点呼になっても起きてこない人がいた。布団をあけてみたら、中は血だらけで隣の人の布団まで滲みこんでいた。夜、布団の中で太ももの付け根にある大動脈を自分で切断して自殺したのだ。校内病院の院長だった彼は、最も確実な方法で自殺したのだ」。終始穏やかな郝斌教授は、この話になった時だけ、表情を曇らせていた。

当時暴力を振るった加害者、例えばかつての紅衛兵たちは、文革後に反省をしたのか。これは筆者が以前から抱いていた疑問である。郝斌教授の話の聞くと、一部の個人に反省が見られるものの、依然として不十分であることが分かった。

今回のインタビュー中、郝斌教授が新たに雑誌で公表された一篇の文章「截屏一瞥周一良」<sup>7</sup>を示してくれた。その文章の一節から、郝斌教

授の心中を察することができる：「文革期の暴力は、社会問題である。暴力を振るうことと侮辱を受けることに、大勢の人が巻き込まれていたのだ。当時では暴力を振るうことを鼓舞する社会全体の雰囲気濃厚であったから、多くの人が暴力の舞台上に押し上げられたのである。しかし今日では、謝罪する雰囲気も必要である。当時の暴力を振るう側と受ける側の両方を、謝罪すると謝罪を受けて相手を許すという舞台に押し上げていくことこそが、理にかなうのである。文革が終結してからこれだけの年数が過ぎたが、誰かがそのような舞台を組み立てようとしたのか？すでにあった二、三の階段でさえ、気付かないうちに取り壊されてしまったのだ（筆者訳）」。

本書は、筆者が今までに読んだ文革回想録とは、形式上異なっている点がある。各章の末尾に、章回小説のように二行の対句を用いて内容をまとめ、締めくくっている。章回小説は、宋代の盛り場で流行した講談の台本に由来し、日本でもよく知られる『三国志演義』はその代表の一つである。この独特な形式は、本書に語り物のような臨場感を与え、さらに深い思考を促す余韻を生み出した。ほかの回想録と同様に、そこに描かれた文革時代の人間ドラマは、極めて厳しい内容であったが、本書は、ひたすら苦しい経験を訴えるのではなく、被害者としての立場から離れた、郝斌教授の歴史学者としての眼差しも伴っている。いわば複眼的に文革を捉えているのである。このような表現方法を選んだ理由について尋ねてみると、郝斌教授は「意犹未尽（意はなお尽きぬ）」だったからとおっしゃった。本書に込めた郝斌教授の切なる思いを、重々しく感じ取った。

<sup>7</sup> 郝斌「截屏一瞥周一良」、『江淮文史』2017年第1期、

江淮文史雜誌社。

### 三、面影を探して

インタビューは2時間以上に及んだ。終了後、郝斌教授は北京大学のキャンパスを案内してくれた。書中でストーリーの舞台となる校内の各処を一々紹介して下さった。本書の日本語訳の第一部は、すでに『大阪経済法科大学論集』第111号（2016年10月、大阪経済法科大学経法学会）で公刊した。翻訳中で触れたこれらの場所に自らの足を実際に運んでみると、過去の歴史が脳裏に浮かびあがり、よりいっそう印象が深まった。

まず未名湖畔を沿って、東グラウンド（図1）へ行った。1966年7月25日夜、全校教職員が参加する「万人大会」はここで開かれていた。郝斌教授はその場で毛沢東夫人の江青に名指しされ、「毛主席と江青の娘李訥を迫害した」という罪に問われたが、それは冤罪であった。この場所はまさしく郝斌教授の3年「牛棚」生活が始まった地点である。見学したこの日は晴天に恵まれ、グラウンドにサッカーを楽しむ学生のグループがいた。同じ場所での、50年前の出来事を今の若者にどのように伝えていくかを課題として感じながら、この場を離れた。



図1



図2



図3

つぎは、当時の歴史学部事務所所在地一三号院（図2）へ向かった。東グラウンドから未名湖畔に戻り、さらに南へ進むと、講義棟が立ち並ぶ教学区域となる。図書館のそばを通り過ぎ、第二体育館の北側に「静園」という緑地がある。その「静園」を真ん中に囲み、両側に数字順に一号院～六号院と呼ばれる中庭付きの古風な建物が六棟ある。三号院は西南の一角を占める。

1966年6月から、批判対象とされる歴史学部の教員たちは、毎日この場所で集合し、点呼を

受け、キャンパスでの強制労働へ連れ出されていた。もちろん、何回かここで暴力的な場面も発生した。翻訳中の本書第4章「陰陽頭旋風<sup>8</sup>」で描かれた暴行、つまり強制剃髪もこの中庭（図3）で行われていた。中庭を通して我われは2階にあるバルコニーに上がった。1966年8月のある日、ここで郝斌教授を含む歴史学部の教員24人は、バルコニー外の排水槽で一列に並んで土下座させられ、中庭いっぱいに埋まった地方からやってきた革命群衆の前で批判を受けた。腰までの高さがあるこの欄干（図5）をど

<sup>8</sup> 「陰陽頭」とは、強制的に右半分の髪の毛を剃り落とし、残った左半分の髪の毛も長短デコボコに切るという侮辱的なやり方を指す。こうして「陰陽頭」にされ

た批判対象は、日常生活の中でも一目で分かるようになる。

のように乗り越えていったか、今では考えられないと郝斌教授は言う。欄干外の排水槽は、大人一人がやっと立てるくらいの奥行である。当時は溝に石が敷かれ、鉄製の防水カバーもなか

った（図6）。図4は、中庭から2階建ての正面棟を撮った写真である。突き出している排水槽の上で、教員たちが土下座させられていた。



図4



図5



図6

三号院を出てさらに南に進み、当時の知名教授たちが住んでいた燕南園である。最初に訪れたのは燕南園50号（図7、図8）、当時の北京大学図書館長、歴史学部教授向達の居処。ここは三号院に一番近い。向達教授は敦煌研究で知

られ、文革の強制収容生活中に健康を損ない、入院治療が遅れそのまま他界した。竹林の向こうに見える建物は50年前と変わっていないが、中の住民はすでにはかの人が変わってしまった。



図7



図8



図9

続いては燕南園64号（図9）。ここは1966年の文革開始時に真っ先に批判を受けた歴史学部長翦伯賛の最後の住居であった。1968年に彼の待遇がやや改善され、再び北京大学内に住むことが許されこの64号に移ったが、およそ1か月

が経ったある日、軍服を着た人物が尋問のために彼の病床を訪れ、長時間にわたって厳しい尋問を行った。その夜、翦伯賛は遺書を残して夫人とともに服薬自殺した。66年から三年近く、いくつも苦難を乗り越えやっと好転を迎えたこ

の時期に、なぜ彼は死地に追い込まれたのか。  
真相は未だに闇に葬られたままである。

#### 四、記憶のかたち

インタビューの翌日、筆者はもう一度北京大学を訪れ、校史館を見学した。

百年以上に及ぶ北京大学の歴史のなかで、文革の十年間がどのように記録され展示されているかに、興味を持ったからである。

九段階に分けて紹介された北京大学の歴史の中では、文革の十年間はほかの時期に比べ、展示パネルの資料は豊富とは言えないが、幾つかの重要な数字や事実が確認できた。

文化大革命中、北京大学で不法な家宅捜査を受けたのは407戸（世帯）、のちに冤罪となったものは1059名、著名な学者翦伯贊を含む63名は

異常死した。四年間にわたって学生募集と教学が停止状態に陥り、多大な損失を被った。

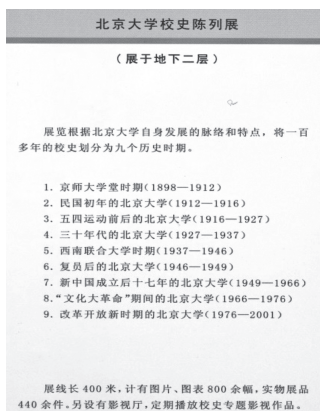
1966年10月、「黒幫分子に対する管理を強化する通知」が発表され、対象者は昌平区太平庄などに強制収容され、強制労働をさせられた。1968年5月、校内で「監改大院（つまり牛棚、筆者注）」が設立され、収監された幹部、教授は計218名。1969年春節の解散までに、収監者は各種暴行を施され、極めて厳重な結果となった。

1969年秋、北京大学教師と学生計7000名が、江西、漢中、北京遠郊の農村に連行され、再教育を受けた。そのなか、江西鯉魚洲農場へ行かれた教員と学生は2000名以上である。

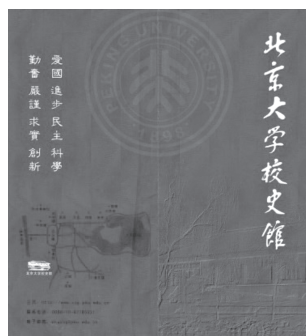
1981年6月の北京大学党委員会の報告によると、文革及び50年代の冤罪に対する名誉回復や事後処理はほぼ終了し、解決した事案は、2860件余りにのぼる。



校史館玄関



校史館パンフレット



翻訳を進めるなかで、当時の様子を確実に伝える資料をもっとたくさん見ることができれば、よりの確に文革の全体像を捉えることができると感じていた。インタビューの中で、歴史学部で当時に関する資料が保存されていないかを尋ねたが、郝斌教授は首を振り、そのような史料をみたことがないようであった。別の情報によれば、北京大学図書館や档案館に文革当時

の学内新聞や写真などの資料が一部保存されていると聞いたが、非常に煩雑な手続きを取らなければ閲覧できないとも教えられた。残念ながら今回の限られた日程では無理なことである。今後の課題にしたい。

「牛棚」の記憶を残すために



北京大西校門外の壁に掲げているスローガン

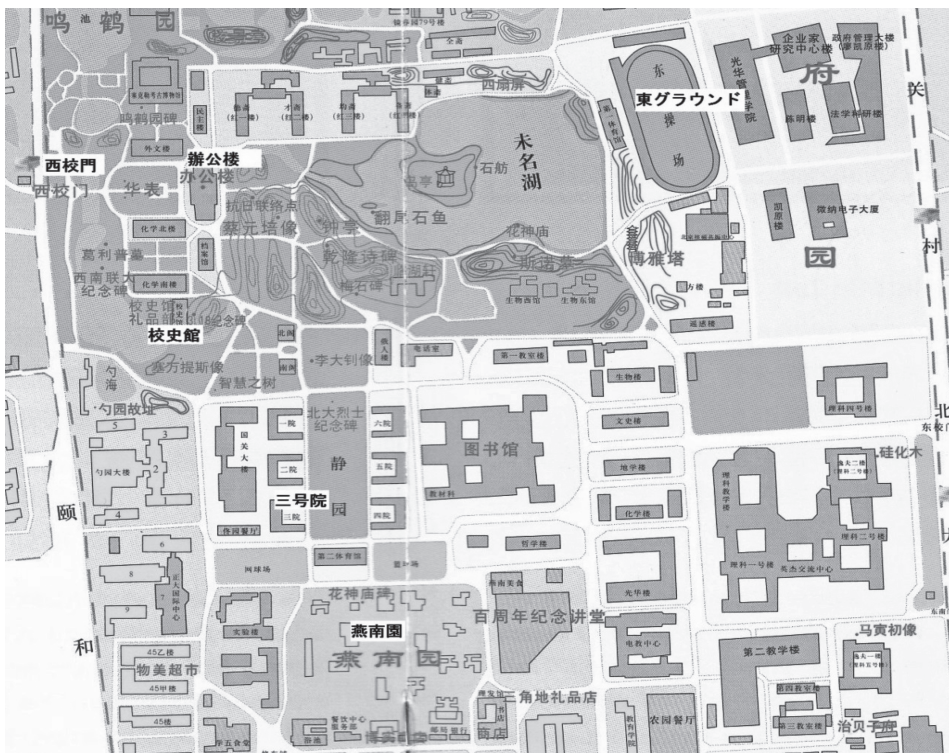
校史館の帰りに、北京大学の外壁に掲げている宣伝用のスローガンを思わずカメラに収めた。

「天下興亡、匹夫有責（天下の興亡、匹夫責あり）」一国の盛衰には、たとえ一般の庶民にも責任がある。明末清初の儒学者顧炎武『日知録』に由来し、清末民初の学者梁啓超により広げられたこのスローガンは、中国では小学生で

も知る言葉である。遡れば、この考えは儒家の始祖孟子にも辿り着く。

数千年の間、中国の読書人はこの教えを覚え、子孫代々、伝統を受け継いできた。学問の道も国の盛衰と固く結ばれたものであると、知識人は信じてきた。

時代の過ちを深く反省し記憶を正して、時は滞ることなく、邁進するであろう。



北京大学構内図（部分。筆者加筆。）

謝辞 本稿は、大阪経済法科大学アジア研究所  
2016年度の研究助成を受けたものである。な  
お、共同研究者である華立教授（大阪経済法  
科大学国際学部）に今回のインタビューに同席し  
て頂き、原稿の作成にも貴重なご意見を頂い

た。ここで郝斌教授、華立教授に謝意を表す  
る。なお、文内に引用した郝斌教授のインタビ  
ュー内容は、本文筆者がメモに基づいて和訳し  
たものである。